

## 五重塔

東寺の塔は、京都の目印であり、街中から見る事ができる。高さは 55 メートルで、日本で最も高い伝統的な木造の建築物である。そのスレンダーな形にもかかわらず、驚くべき耐震性を備えているが、残念ながら落雷には弱い。この塔は今まで 4 度も焼失し、直近では 1644 年に徳川 3 代目の将軍である徳川家光（1604-1651）の支援のもとに再建された。

（このような）塔は、埋葬や仏舎利を納める目的で古代から使われていた建物であるインドの仏舎利塔が発展したものである。この（東寺の）塔は、もともとは、真言宗の創始者である空海（774-835）によって中国から日本にもたらされた歴史的なお釈迦様（Siddhārtha Gautama、紀元前 6 世紀）の仏舎利を祀るために建てられた。仏舎利はこの塔の心柱の中に収められている。

心柱は、真言佛教の最も重要な場所を占める原始または宇宙の佛である大日如来を象徴している。塔の内部では、心柱は四尊の如来に囲まれており、真言密教における世界を表現した代表的なものである金剛界曼荼羅の中心に見ることができる五智如来を、大日如来と共に構成している。佛像の同じ配置は講堂の佛像の配置の中に見出すことができる。

塔の内部の壁には、空海や真言八祖像や龍の絵が描かれている。龍は中国と日本の神話に登場する水の生き物であり、この絵は木造の五重塔を火災から守ることを目的として描かれている。最後の特徴的なタッチは建物の外側で見つけることができる。邪鬼と呼ばれる小さな悪魔のような生き物の彫刻が、それぞれの角の突き出た梁に腰掛けて、屋根を支えているようである。